

シリーズ

“キラリ企業”の現場から 第38回

会社の支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業の現場から”。

第38回目は、東京都品川区で「歯ブラシ」の開発・製造・販売を中心に事業を展開しているファイン株式会社をご紹介します。歯ブラシ専門のメーカーとしてベビー用から介護用まで、様々なニーズに応えております。同社は、「売れる製品開発道場」で自社製品開発のための手法を学ぶとともに、事業承継支援策、ニューマーケット開拓支援事業等を利用されています。

女性の感性と柔軟な経営戦略を活かし、 独自の「歯ブラシ」で社会に貢献

ファイン株式会社

1. 時流を掴む柔軟な経営戦略の実践

ファイン株式会社は、歯ブラシの開発・製造・販売を中心に事業を展開しており、その歴史は昭和23年まで遡る。電力供給が不安定だったその当時、「明かり」への需要に応えるためローソクの製造を手掛ける会社を創業した事が始まりである。創業者は起業家精神に溢れ、かつ時流を掴むことに大変優れていた。事業を軌道に乗せると、歯ブラシの開発・製造・販売、更には病院経営へと業容を拡大していったのである。その後歯ブラシ部門を分離してファイン株式会社を設立し、甥の清水益男氏が代表取締役となった。現在は益男氏の妻、和恵氏が代表取締役を務めている。

設立当初は、全国の薬局・薬店を主な顧客として順調に拡大していったが、その後は決して順風満帆だったわけではない。スーパーマーケット等の台頭により薬局は減少し始めた。この時、社長であった益男氏はこれにいち早く対応し、大手企業へのOEM供給の割合を増加させ、安定した収益を確保した。また、バブル崩壊後の不況でOEMが



三女で副社長の直子氏(左)と社長の和恵氏(右)

受注の激減しつつあった時も、この頃代表取締役に就任した和恵氏が、すかさずOEMへの依存度低下策を図り、自社商品の開発に着手、これが功を奏して危機を逃れた。

時流の変化を見逃さないという、創業者の精神を脈々と受け継ぎ、予測困難な環境変化に柔軟に対応することで難局を乗り切ってきた。

現在同社は営業、開発、工場、管理部門と総勢24名で構成されている。また次代を担うべく、和恵氏の三女である直子氏が副社長、長女の薫氏も取締役として新商品開発の企画やデザインを担当している。

2. 「廃番」にはしない！ 商品開発に込められた「思い」

和恵氏は代表取締役就任後、商品開発に力を入れてきたが、そこには他社にはない特徴的な方針がある。1つは可能な限り「廃番にしない」という商品開発の考え方である。歯ブラシ市場は大手数社で約90%のシェアを占め、残り10%に数十社の中小企業が乱立する状況だと言われている。この厳しい環境下で同社は、耐久性に優れていると定評がある品質の良さと、障害等で普通の歯ブラシでは上手く使用できない人向けの商品で差別化を図っている。この商品は、顧客の生の声を聞き、開発している。障害によって各々抱えている問題もさまざま。そのため商品はバリエーションに富んでいる。注文があまりない商品もあるが、材料が入手可能な限り廃番にはしないという。商品を必要としている方々に対し、確実に提供するという使命感を持って臨んでいるからである。

もうひとつの特徴は、商品開発の方法である。同社は主に社長の和恵氏と2人の娘による母娘3人で商品の企画を行っている。社長1人で全て決めるのではなく、3人の女性による「感性」と「個性」を活かした商品開発を大切に、これに工場長と営業を加えて開発チームを構成している。



ロングセラー商品「ぶうびい」

こうして開発された商品は、現在約80アイテムにもものぼり、次の3つに大別される。

1つはベビー用の歯ブラシで、母親が手を添えるものから子供一人で歯磨きできるものまでがある。特に、のどまで届かないよう、柄がリング状になっている「ぶうびい」は14年前に発売以来、毎年約20万本販売するロングセラーである。

2つ目は障害者・高齢者に対する口内ケア用の商品で、介護する側とされる側両方の目線で快適さと安全性を意識して開発されている。中でも主力なのは、汚れを吸い取りながらみがける吸引器専用歯ブラシ「ハッピー」と開口器「ホタル」、ペンライトが揃ったセットで、介護者一人でも簡単に口内ケアができるよう工夫がなされている。

3つ目はエコ歯ブラシで、年間数億本捨てられていると言われる歯ブラシに、土に埋めると微生物の働きにより分解できる素材を使用する等、環境に適応した商品づくりがされている。

単に利潤を追求するだけではなく、人に必要とされ、世の中に残せる商品を開発



自社商品の一部

することを大切にしている。また、同時に「ものづくり」の楽しさも忘れない。色、重さ等にもこだわり、利用しやすい商品づくりを心掛けており、経済産業省(当時通商産業省)のグッドデザイン賞、また東久邇宮記念賞等の受賞につながっている。

3. 「障害者用歯ブラシ」の開発物語

同社の商品開発におけるこだわりを物語るエピソードがある。ある時、手や肩、握力等に障害があり、物を持ち上げる力や握る力が少ない方でも使用し易い歯ブラシの開発を依頼された。和恵社長は、何とか期待に応えたい一心で開発に着手する。しかし実際に試作品を開発して、試しに使うて頂くために持っていくと、障害者にとって使い勝手がよい歯ブラシではなかった。その理由は、使う側の状態や口の位置等が人によりそれぞれ異なるにも関わらず、それを考慮しきれていなかったからだそうである。机上で考えたものと現実とのギャップを埋められず、期待に応えられなかった和恵社長は大変苦しい思いをしたという。

しかしそれでも和恵社長を中心とした開発チームは決して諦めることはなかった。通常の倍の開発期間をかけて改良を重ね、そして遂に、障害を持つ方が自分の状態に合わせて柄の角度を自在に変化できるように改良すること

を思いついた。歯ブラシの柄の部分には力がなくとも持てるようにハーフレングを付け、ブラシの角度を簡単に変えられるよう回転グリップをつけることで問題を解決したのである。また、この商品は歯ブラシの部分ワンタッチでスプーンやフォークに付け替えることを可能にした。このような開発プロセスを経て、顧客に必要とされる商品の1つとなった。

一般の方向けの歯ブラシと比べると、決して大きいとは言えない特殊な市場ではあるが、確かに必要としている人に応えていくことを大切に、またそこに喜びを見出す同社の経営姿勢が伺える。



回転グリップ「レボ」

4. 今後の展望

これまで柔軟な経営戦略の実践と使命感を持って開発された自社商品により信頼を構築してきたが、同社は将来を見据え2つの点を重要視している。

一つは経営を次世代へスムーズにバトンタッチすることである。変革する時代の中で会社も変わらなくてはならない。副社長である直子氏は公社の平成20年度事業承継塾に参加した。創業以来受け継がれてきた時流を掴む経営戦略の実践に加え、次世代への事業の承継を重要な経営課題と捉えて前向きに活動している。

もう一つが商品開発力の強化である。これまでも数多くの商品を生み出してきた同社であるが、同時に課題もある。コンセプトに基づいた商品開発や女性の感性を反映する表現力など、今後意識的に強化していく必要性を感じているという。これを解決すべく、直子氏は公社城南支社の「売れる製品開発道場」に参加して、新製品開発の手法を習得する為に奮闘中である。

今後も環境に柔軟に適応して継続し続ける企業であると共に、誇りを持てる商品づくりを行って信頼を深めるべく、同社は努力を続けている。

(城南支社 井元英路)

.....
企業名: ファイン株式会社
代表取締役: 清水 和恵
資本金: 2,000万円
従業員数: 24名
本社所在地: 東京都品川区南大井3-8-17
TEL : 03-3761-5147
FAX : 03-3768-4930
URL : <http://www.fine-revolution.co.jp/>
